



「KSプロジェクト」がスタート 海城の学びは 新たなフェーズへ

2017年度、海城学園で始動したのが「KSプロジェクト」。これまでの「アウトカム重視の改革」から「計算不可能なことを設計する改革」への転換をめざしている。このプロジェクトの狙いとは何か。校長特別補佐の中田大成先生に聞いた。

「あえて計算不可能な偶然性に満ちた学びを提供」

「KSプロジェクト」導入の目的からお聞かせください。

中田 海城学園では、創立100年にあたる1992年から学校改革を進めてきましたが、従来はアウトカム（成果）重視の改革が中心でした。たとえば「社会科学総合学習」は、新しい学力観に基づく問題発見・解決能力、「プロジェクトアドベンチャー」や「ドラマエデュケーション」は、新しい人間力であるコミュニケーションとコラボレーションの力、「芸術教育」は創造性や感性といったように、プログラムを通して育む能力・スキルが明確だったわけです。それに対して、「KSプロジェクト」は、プログラムで取り組んだことが、将来どのような成果につながるのか、計算不可能な学びなのです。それをあえて提供するところに大きな特色があります。

——その意義は何でしょうか。

中田 現代社会がさまざまな意味で行き詰まりを見せている中で、生徒たちには未来を切り拓く力が求められます。けれども、我々教員世代が思いつくような学びであれば、今の世界を越えるようなものを創造する力は育まれないでしょう。そこで重要なキーワードになるのが「偶然性」です。本来、イノベティブ、クリエイティブなもの、ゼ

口から創り出されるケースはほとんどありません。まったく異なると思われていたもの同士が、いくつもの偶然が絡むことで関連づけられ、化学反応が起こることによって生み出されるのです。「KSプロジェクト」では、誰も気づかなかった、常識を疑うような「偶然性」に満ちた学びを提供します。その経験を通して、生徒たちが新しい価値を創造し、未来への希望を花開かせられる教育に踏み込んでいきます。海城学園の教育は新たなフェーズに入ったといえます。

「プログラミング、俳句甲子園など多彩なプロジェクト」

——どのようなプロジェクト内容になっているのですか。

中田 本校には、正規の授業の枠では収まり切れない、突出した興味・関心を持つ生徒がたくさんいます。その「尖った」興味・関心を、さらに研ぎ澄ませられるプロジェクトをめざしています。当然、生徒の主體的な活動であることがとても重要になるので、「KSプロジェクト」は必修にはしていません。参加形態もきわめてフレキシブルにしています。特定の分野・テーマについて関心のある生徒が学年に関係なく集まり、教員も担当教科の枠を越えて参加し、一緒に深く追求していきます。期間



校長特別補佐 中田大成 先生

や場所などの制約を撤廃した点も特徴です。テーマによっては、学期・学年の範囲内で収まらないケースも多いでしょうし、校外で学習する必要性も想定されるからです。いつ、どこで、どれくらいの期間実施してもいいことになっています。

——かなりフレキシブルな活動になっているのですか。

中田 ただし、プロジェクトを設計する際に、1つだけ条件を課しています。それは学校の中だけで完結させず、必ず外部と触れる機会を設けるということです。外部に開かれることが、「偶然性」を高める上で、とても大切だと考えているからです。プロジェクトによっては校外での活動が想定しにくいものもあると思いますが、最低でも文化祭での発表を義務づけています。来場者と交流し、質疑応答する中で、新たな気づきも生まれるはずですよ。

——具体的なプロジェクトを紹介してください。

中田 森本教授の分析によると、「記述のレベルが高い」「何をしたか」を書くだけで終わってしまう。高校生が多いが、海城の生徒は「活動を振り返って何に気づいたか」「気づいたことを踏まえて、次はどう改善すればいいか」という3段階の思考プロセスができています」との言葉をいただきました。これは、中学3年間毎学期、自分でテーマを決めて、調べ学習を行い、レポートをまとめる『社会科学総合学習』の効果も大きいと考えています。設定したテーマに関して、社会でどんなことが起こっているのか、まず事実を書いた上で、その中で何が課題になっているのかを書き、それを解決するためにどうすればいいのかを提案する、論文の形式が身についているわけですね。先ほど、「KSプロジェクト」の始動によって、海城学園の教育は新たなフェーズに入ると申し上げましたが、

「KSプロジェクト」は、本校の生徒と一緒に日本の国立医学部数学講座を受講します。スカイプで結び、両校の生徒の答案を比較したり、医療関連のテーマでディスカッションをしたりすることによって、受験勉強のモチベーションを高めています。

そのほか、英語で本校を紹介する新聞を作成する「Kaijo Times」で世界へ発信、「国連で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）を考えるワークショップ」を生徒主体で開催する「SDGsゼミ」、生徒が自分たちで実験内容を決めて、撮影・編集した動画を新モンゴル学園に送る「生物・化学実験の動画を撮ろう」、フィールドワークを行う「歴史、文学、地質、物理学など、多様な視点から地域を考える」「総合フィールド演習」などの活動があります。いずれも生徒たちが生き生きと取り組む姿が見られます。

——「KSプロジェクト」を通して、どのような力の涵養を期待されているのでしょうか。

中田 新しい大学入試においては、高校3年間の活動履歴や学習履歴が評価の対象になります。「KSプロジェクト」の活動を蓄積することで、アピール材料になるでしょう。活動の蓄積のため、東京学芸大学の森本康彦教授との共同研究で「eポートフォリオ」も導入しています。ただし、それは必ずしも大学入試改革だけを意識して導入したのではなく、生徒が自分の活動を



SDGsゼミでは、生徒自ら電子黒板を活用し、ワークショップを開催している。



生徒に最も人気のある、外部から専門家を招聘して行われるプログラミング講座。

「持続的な学習意欲が高まる新しい大学入試でも強みに」

「KSプロジェクト」を通して、どのような力の涵養を期待されているのでしょうか。